
赤い花・青い花

きみよし藪太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤い花・青い花

【Nコード】

N0814M

【作者名】

きみよし藪太

【あらすじ】

仲間内、という関係で酒を飲んでいた。

お互いにその気になれなかった人を振ってしまった夜に、酔っ払ってなんとなくお互いを意識した。

一度寝たからと言って、恋人同士になるわけではない。そんな言い訳をしながら。

シャワーを浴びる彼女の水音を聞いている。

生まれて四度目に抱いたのは、今までで一番上手い女だった。

その日、俺も彼女も仲間内の奴等から想いを告げられ、それぞれ相手を振ってしまったという夜だった。自分の気持ち動かないのだから仕方のない事なのだが、どうも人を傷付けたという出来事は後味が悪くていけない。他の仲間と冷蔵庫で眠っていたスパークリングワインだの部屋に転がっていた日本酒だのを飲んでいただけれど、気がつくとな彼女だけが部屋に残っていた。俺は随分と飲んでしまっているようだった。

「他の奴等は？」

「帰ったじゃない、玄関で転んだわたしをあなたが部屋に連れ戻しちゃったのよ、覚えてないの？」

ええっと、と言葉を濁してから目の前にあったコップに入っている紫色の液体を手取る。こげぱんの絵がついたグラス。確か去年あたりにゲーセンで取った。

「あきれた」

ちつとも呆れていない顔でそう言うと、彼女も同じように机の上にあったワインに口をつける。飲めないはずだと気付いたのは、彼女の体内に液体が半分以上消えてからだった。

「飲んでる」

「飲んでるわよ、なに、どうしたの」

「いや、ワイン嫌いなんじゃなかったっけ」

残りをぐっと飲み干して、彼女は勢いのままコップを置いた。タン、といい音がする。まるで葡萄ジュースを飲むようだ。

「嫌いよ、酸っぱくて甘苦くて、吐きそうになるもの、美味しくないし」

「なんで、じゃあ飲んでるんだよ」

「出されたものに文句を言うのは失礼じゃないの」

今度は本当に呆れた顔をして、彼女は俺の顔をじっと見た。細い目、いつもすぐに酔って縁を赤くしているのに、なぜだか今日はやたらと白い顔をつるりとさせている。

「誰かを振ったって？」

「ああ？」

「噂よ、噂。随分大人しい娘を泣かせたのね」

「それならお前こそ、噂を聞いたぞなかなかいい男を振ったらしいな」

いい男？ と彼女が眉を釣り上げた。もちろんそんなただの嫌味だ、少なくとも俺よりいい男じゃない、俺より背が高いだけだ。

「あんなみみっちくて女々しい男、嫌だわ、わたしの身体にすぐ触れたがるんだもの、しかもわたしが誘ったかのように吹聴するのが、最悪」

「俺だって、ああいうお嬢様は駄目なんだよ、すぐ嫉妬したり泣いたり恋愛よりも友情が大事だって場合があるのを理解してくれないようなね」

「……あんなお嬢様が好きなのかと思ってたわ」

彼女は黒目を上の方へぐりと動かし、何かを想像している顔をした。きつと俺が振った女の顔を思い出しているのだろう。目がでかくて、福の神みたいに縁起の良さそうな笑顔を絶やさない、幼稚園の先生をしている女の子を。

「お前、触られるの好きじゃん」

俺も彼女が振った男を思い出してみる。黙っていればナントカってバンドのやたらと切ない声をしたボーカルに似ていなくもないような気がする、細く白い男。確かに、むっつりっばいけれど。

「冗談じゃない、わたしが触りたいのはわたしが好きな人間にだけだわ」

「あいつは嫌いなのか」

「興味がないだけだったけど今は嫌い、わたしの気を引くために他人の悪口言う男よ」

「そりゃ最低だ」

「でしよう、最低、もう近寄りたくもない」

ワインのなくなったグラスに指を這わせて、彼女はマシングンのように早口で喋ると、俺を見てにつこり笑った。正直な話、俺も彼女も顔の造りはそんなに丁寧じゃない。人から好かれてしまうのは、彼女は自分の肉体をあまりにも簡単に他人へ放り投げてしまうし、俺は変なところで優しくない優しさをだらだと吐き出してしまふからなのだろう。だから変な奴にばかり、もう少しマシな言い方をすれば、自分の好みではない奴にばかり好かれてしまうのだと思う。もちろん、自分の好みの相手だってちゃんと手に入れたりする時期はあるのだけれど。

「なんだよ」

「うっん、あんまり可愛い顔してると襲うわよって、言おうと思つて」

「は、俺が？ 可愛い顔してた？」

「冗談じゃない、と今度は俺が言った。

「なんだい、そりゃ」

もしかしてお前、俺が好きなのか、と聞くと、まさか、と彼女は笑った。

「あんたみたいに誰にでも優しい男、嫌いよ」

「言われ様だな」

「甘やかしてあげるから、黙って抱かれなない？」

「なんだお前、発情期か」

「発情期のわたしだったら、有無を言わさずズボン下ろすぐらいするわ」

恐い女、と言ったら、彼女は鼻で笑った。今ごろ知つたの、駄目ね女に騙されるタイプよ、と。

彼女が座っていた俺の膝の間に手をついた。ぐ、と身体が近づけられる。柔らかな汗が匂う。茶色い髪からは花のような匂いがした。大胆なくせに中途半端に恥じらう頬が染まっている。もっと酔わせ

てあげれば良かったんだ、と意味のない反省をした。そしたらちゃんと俺を襲えただろうに、酔いのせいにして。

「抱くって？ セックス？」

「違うわよ、抱きしめる方、抱っこ」

「そんなんで満足する？」

するわよ、人をなんだと思ってるのかしらみなして、と彼女はどちらかといえばいつも細められている目に真剣な光を反射させ、そのやや茶色い瞳に俺を映した。唇が降りてくる。それは、俺の頬を、頬を、額を、顎を、ランダムに突付いて触れて離れた。いつ唇にこいつのそれが重なるのだろうと思っていたのだけれど、彼女にその気はないようだった。触れるだけのくすぐったさに、俺は目を閉じてじつと我慢する。彼女の舌が耳を撫でて、首筋をなぞっても。

うふふふふ、と彼女が笑みを漏らす。頬に何度目かの感触。楽しいのかと聞くと、もちろん、と返ってきた。そんな事がしたかったのか、と重ねて聞くと、ほんの少しの沈黙の後、意味ありげに曖昧な返事。さあ、と軽い声が耳に滑り込む。

「ちよつと待てよ、理性が飛んだらヤバイだろ」

俺は彼女を引き剥がすと、乾きはじめていた喉に彼女の嫌いな液体を注いだ。紫色のアルコールを飲み 干す間、彼女の横顔をそっと見詰める。

遊びはこれで終わりだと勘違いしている顔。

ああ、楽しかった、と満足げなため息を吐きそうなその顔に。

「おい、」

声をかけた。

振り向く白い顎が、目に焼き付いた。ぼつてりと赤い唇。

「仲間でこっぴどいって、後が面倒だろ、駄目だ、お前は好きだけど、そういう対象じゃない」

「……知ってるわよ、え、何……」

俺の事を嘔吐きだと、彼女は思っただろう。

俺だっと思った。俺は嘔吐きだと。ひとつ言わせてもらえば、もてない訳じゃないけれど俺は付き合った女以外とはセックスをしない主義だった。据膳は食わない。鈍感な男といわれてもいい、そういうのには気付かない振りをずっとしてきた。

どうしてこの女だけ、キスしてもいいと思ってしまったのだろう。どうしてこの女だけ、付き合ってもいいのに抱いてもいいかと思っただろう。

「抱いたからって、明日から付き合う訳じゃない」

言い訳は誰の為のものなのか、口にした俺にさえさっぱり分からなかった。もしかしたら、過去の恋人たちへのものだったかもしれないし、振ってしまった女に対してのものだったかもしれないし、彼女へのものだったかもしれない。すべてである可能性だってあった。俺の為でももちろんあった。

そんなの知ってるわ、と、彼女の唇が動いたかどうかは知らない。確認する間はなかった。俺が、自分のそれを重ねてしまったから。

彼女はすごく驚いたんだろう、身体がそのまま固まった。俺も出来るなら固まりたかった。なにしてんだよ、という自分の笑い声が頭の中にガンガンと響く。おい、なにを手エ出してんだ、後々面倒に事になったらどうすんだよ、そんな声が、頭の中でぐるぐるん回った。

それでもまあいいや、と思ったのは、彼女の唇があまりに柔らかくて、そしてちよつとしたらきちんと意識を正常位置に戻した彼女がそのなかなか上手な舌使いで俺のくちづけに答えはじめたからだ。った。

途中からは夢中。

電気の眩しさだけが瞼をさして、邪魔だったから少し唇を離して電気を消した。その時の切なさときたら。前の恋人と別れてから二年経っていた。そんなにも長い間キスなんてしていなくて、だからそういう行為に飢えていたんだと知った時の軽いよろめき。

「……あいつに触られるのは嫌でも、俺ならいいのか」

「嫌だ、こんな時にあんな顔思い出させないでよ」

静かに笑って、彼女は俺の首へ鼻を埋めた。繰り返される、肌を
探る舌先の濡れた感触。俺も、と彼女を押さえつけようとしたらす
るりと逃げられた。

「なんだよ、」

「駄目よ、わたし汗かいているもの」

「俺だって」

「あなたはいいのよ、別に」

彼女の目がいつもの細められた目に戻っていた。この女、俺を好
きなんじゃないかと、結構本気で思った。うぬぼれだろうか。

「なら、シャワーを使えばいい」

なんなら一緒に入ってもいい、とからかえば、真剣な声で、馬鹿
と声が返ってくる。

「……なにしてんだろ、な」

「考えちゃ駄目なのよ、そういう事は」

「虚しい行為だと気付くから？」

「本気で欲しくなったら奪いに行くぐらいの勇氣はあるわよ」

「それ、俺の事？」

「身体から始まる関係なんて信じていないんでしょ」

正直に言えば、と俺は正直に答えた。身体から始まる関係ってい
うのは、他の奴は知らない、でも俺にとっては一番欲しい行為を与
えられてしまっている状態な訳であって、それ以上付き合うなんて
いう苦勞をしてまで相手の女を欲しがるかどうか、自信がない。

身体の相性がものすごく絶妙で、こいつしかいないと思ったんな
ら別としても。

「シャワー、浴びたら引き返せなくなるわ」

「理性飛ばせば」

「明日からまたお友達でいられるかしら」

「努力する」

「自信はないのね、そんな言葉が出て来るって事は」

艶やかに微笑んで、彼女は立上がる。その中間でキス。甘い唇、あなたの味ならワインも嫌いじゃないわ、とそつと囁かれた。その時に背筋を走った電気。

紺色のバスタオルを指差す。客用だから、と言うと、彼女はもう一度俺にくちづけた。柔らかな舌。奥まで入り込んで、俺の魂を掻き出そうとする動き。ジャージのズボンですらきついくらいだった。早く抱きたくて。

「恥かしいから覗いちゃ駄目」

するりとバスルームに消える背中、俺が今まで愛してきた女達とはタイプの違う彼女。俺はこげぱんのコップにワインを注ぐ。

やがて流れてきた水音に、合せてそれを口に運んだ。

身体から始まる関係、彼女はそれを信じているのだろうか。

これからの行為を考えて、ソファに敷いてあった布を床に広げた。彼女は、どんな声で鳴くのだろう。俺の下で。

早く出てくればいいのに、と思って、すぐに反対の事も思った。ずっと出てこなければいいと。酔って転んではかりいる彼女の身体には、青痣の花が咲いているだろう。そこに、俺のキスマークで咲く赤い花を残してやろうと思った。実際はどうなるか分からないけれど。早く出てくればいいのに。ずっと出てこなければいいのに。

俺は少し混乱していて、そしてゆるやかに、明けてゆく空を考えた。

終わって彼女がこの部屋を出て行く時、きっと俺は寂しいんだろ
うな、と思った自分に驚いて、そして彼女の白い身体だけをずっと
想像していた。水音が聞こえる。彼女の背を、俺の指のようにすべ
る、水音。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0814m/>

赤い花・青い花

2010年10月8日14時38分発行